ヨシュア記総集編

マラナサ・グレース・フェロシップ　菊地　一徳氏

では、今日は**ヨシュア記総集編**、そしてそれは終末預言という観点から全体を網羅して読んでいきたいと思います。イエス・キリストは戻って来られます。イエス・キリストはクリスチャンを、キリストの花嫁をお迎えにもう一度この世に戻って来られます。それを**携挙**というふうに私たちは呼ぶわけですが、携挙とは一体なんですかと。これは専門用語ですから普通には辞書等には載っていないかもしれませんが、イエス・キリストが再び教会をお迎えに、教会というのはキリストの花嫁と呼ばれていますが、花婿が私たち花嫁を連れ去っていく。花嫁泥棒のような。これは決して恐ろしい事件ではなくて、まさに私たちを愛して止まない方が私たちをまるでさらって行ってくれるような、そんな花婿の行為であります。

それは聖書の預言の中に見られるわけですが、聖書の 3 分の 1 は預言で占められています。これは多くのクリスチャンもあまり意識していない点であろうかと思います。「私は預言なんて何の興味もありません。」と言う人もいるかもしれませんが、聖書を学ぶのであれば全体の 3 分の 1 が預言である以上は、預言に興味を持たないというわけにはいかないと思います。

そして**ヨシュア記**の中から今日はその預言的な観点、しかも預言といっても世の終わりの預言。世の終わりというのは、今の時代を指すと私は確信しています。これから先に起こること、そうしたことが特に終末預言と呼ばれるわけですが、「いつから世の終わりは始まったんですか。」とよく質問されますけれども、厳密にはイスラエルが再興してからです。イスラエル共和国が 1948 年 5 月 14 日に独立をしました。これも後で触れますが、それが一番分かりやすい世の終わりの兆候であります。これからはイスラエルを中心として世界情勢が動いていきます。1948 年以前はイスラエルが世界で注目されることは全くありませんでした。それまではオスマントルコの荒れ果てたひなびた土地、辺境の地でありました。その後イギリスが委任統治をして、そして第二次世界大戦を経て、皆さんもご存じのホロコーストによって、ナチスドイツによって 600 万人ものユダヤ人が虐殺されました。戦後、第二次世界大戦後、世界はユダヤ人を憐れみました。同情したんです。それが国連を動かして 1948 年にイスラエルは晴れて祖国で独立を果たすことが出来ました。その時にも実は戦争が起こったのですが、それもまた後で触れたいと思います。それ以降不思議と世界が、それまでは誰も見向きもしなかった辺境の地イスラエルに注目するようになりました。私たちの極東の日本の生活にもイスラエルの動向は大きく影響します。常にアラブ連合軍との対立があります。パレスチナ問題です。それは私たちの生活にも直結する問題です。石油問題です。原油の高騰も、原因があるわけですが。いずれにしても世の終わりに起こることを**ヨシュア記**の中にも預言として見ることが出来ますので、今お話ししたことも含めて時系列でなるべく追って行きたいと思いますが、時間が足りないのでほとんど拾い読むような形で進めて、全部は網羅しませんから、網羅しなかったところ、言及しなかったところについては皆さんが個人個人で**ヨシュア記**の中から、これは世の終わりのどういった預言なのかを探って頂き、宝探しをして頂きたいと思います。

そして聖書には世界の始めと終わりが記されています。始めがあれば終わりがあるのは当然のことです。これは実に科学的な話であります。エントロピーの法則というのを皆さんご存知でしょうか。熱力学の第二法則というのがあります。端的に言えば、始めがあれば終わりもある。形あるものは崩れるとよく言います。それは科学的な表現で言うならば、熱力学のエントロピーの法則の第二法則というもので、それは必ず物というのは時間を経て劣化していく、退化していくということです。ですから、進化論というのは非科学的なんです。進化はしないんです。必ず劣化する、退化するのです。実際に進化論を証明する物的証拠は未だかつて発見されておりません。例えば猿から人間に至る間の中間種とされる類人猿なるものの化石というのは、未だかつて発見されていないんです。「でも、教科書で習いました。アウストラロピテスクだとか、ネアンデルタール人だとか、北京原人だとか、ジャワ原人だとか、いろいろテストもそれで答案を書いて、ちゃんと点数をもらいました。」と皆さん言うかもしれません。「大学でも進化論を学びま

した。」と言う人もいると思います。でも、進化論の物的証拠、科学的な証拠というのは、未だかつて発見されていないんです。そのことを勿論第一線で活躍する生物学者たちは知っています。承知の上ででっちあげたり、または都合の悪い点は伏せていて、あくまで仮説に過ぎないものを絶対的な真理であるかのように教えています。エントロピーの法則だけをとってみても、進化論が全く成り立たない仮説だということが分かります。進化はあり得ないということです。退化しかないのです。月も 100 メートル半径が縮んだなんていう話も最近聞きました。太陽もだんだん翳っていくのです。地球も進化どころか、どんどん劣化しているんです。それは自然に子供でも理解できることです。おもちゃを買えば、おもちゃはだんだん古びてくるわけです。だんだん壊れてくるわけです。終(しま)いには使い物にならなくなります。ゴミとなるわけですが、すべてのものはそうです。惑星にしてもそうです。人間にしてもそうです。多分太古の人たちの方が、今の私たちよりも遥かに頭脳を明晰に用いていた。ピラミッドを現代人が造れと言われても、造れないわけです。そのようなことは今話し始めるときりがないので、また話を戻していきたいと思いますが、言いたいことは始めがあれば終わりもあるということです。いつまでもこの世界は続くわけではないということを強調しておきたいと思います。世の終わりがある。それを終末と言います。いつまでも人は死んでもまた別のものに生き返る、輪廻を繰り返してそれが未来永劫続くのではありません。地球ですら、太陽ですら終わる日が来るんです。ですから、輪廻というものも科学的には否定されます。聖書は、はじめにというスタートがあります。**創世記 1:1『初めに、神が天と地を創造した。』**始めがあれば必ず終わりがあります。

その特に世の終わりの預言において一番注目すべきはイスラエルという国でありますが、でもイスラエル以上に目を離してはならないのは、イエス・キリストが再びこの世に戻って来られるという、もうこれは預言の中の最大の預言であります。これ以上素晴らしい預言はありません。

そして**ヨシュア記**のヨシュアという人の名前は、実はイエスと全く同じ名前なんです。言葉が、読み方が違うだけで、"**ヨシュア**"というのは、本来はヘブル語で"**イェシュア**"と発音します。"**イェシュア**"をギリシャ語で発音すると"**イエスース**"となります。新約聖書はギリシャ語で書かれていて、そこでは"**イエスース**"というふうに表記されています。それをラテン語では"**イエズス**"。イエズス会とイエズス。英語では"**ジーザス**"Jesus。日本語では"**イエス**"とただ表記して読むだけであって、実際にはイエスも、ヨシュアも、イェシュアも、イエズスも、ジーザスも、皆同じ名前であります。偶然の一致かと思うかもしれませんが、ですから**ヨシュア記**というのは、"**イエス記**"と呼んでも差し支えありません。事実ヨシュアという人は、イエス・キリストを表す、表現するひな型であると何度もお話ししています。英語ではタイプと言います。ひな型、タイプ、予型、予表というふうな表現もありますけれども、このヨシュアという人は**ヨシュア記**においてイスラエル民族を導いて約束の地カナンへと引き入れるわけですけれども、このヨシュアがイエスに重ね合わせて私たちはこれまでも学んできました。ただ約束の地に入ってから、そこには敵が待ち構えておりました。その敵というのは、実は不法占拠を、不法占有している人たちでありました。なぜならば神様は既にアブラハムに対して、400 年前のことですが、約束の地を与えると。それがカナンという土地であったわけですけれども、でもしばらくはアブラハムの子孫はその約束の地に入ることが出来ませんでした。息子のイサク、その息子のヤコブ、そしてそのヤコブの息子たちは、後にイスラエル 12 部族の先祖となるんですけれども、彼らは飢饉の時にエジプトへ避難しました。食糧の不足から食料避難するわけですが、そこで 400 年間も彼らはエジプトに滞在することになります。神様はもう既にアブラハムに対して約束の地を与えると、約束されていたのですが、すぐにはそこにイスラエルは入ることがなかったわけです。その 400 年間の間に勝手に他民族が入り込んできて、所謂不法占拠、不法占領、不法占有ということをしたわけです。日本でも不法占拠といえば、たとえば竹島問題とかあります。河川敷を勝手にゴルフ場として使うとか、畑を作ってしまうとか。そういうことが約束の地においてもなされていたんです。カナン人と呼ばれる人たちが、神が約束してイスラエルに与えるべきものを勝手に不法占有していたわけです。そこへとヨシュア率いる 300 万人ものイスラエルの民が入って行ったわけです。ですから勘違いして頂きたくないのは、イスラエルが侵略戦争を起こしたのではなくて、元々はそこはイスラエルのために神が用意された土地であって、そこに勝手に侵入者が入って不法占有していたということです。

このことをまた霊的に解釈したいと思いますが、実はこのヨシュアはイエスの型であると言いました。イエス・キリストも神の民である私たちクリスチャンを導いて、私たちを約束の地へと誘(いざな)ってくれるわけですけれども、そこにやはり不法占有している者がいるわけです。“usurper”と英語で言います。それは日本語では、勝手に土地を横領して、そしてそこに勝手に住んで、勝手に支配する。日本語では難しい字ですけれども僭主(せんしゅ)と言う、不法の王が勝手に支配をしているという、その状態が霊的にも真理であると今お話ししたいと思います。その不法占有している者は誰か。それは悪魔、サタンと呼ばれる者であります。聖書によると最初の人アダムとエバは神様から地球を治めるように、支配するようにと所謂地球の土地権利証なるものを(そういう言葉はありませんが)その支配権というのをお与えになりました。このことは**創世記**の最初を見て頂くと書いてあります。ところがご存じのようにアダムとエバは神に従わないで、悪魔に、サタンに従ってしまったのです。食べてはならないというあの禁断の木の実を、善悪の知識の木の実というものを彼らは食べて、神に逆らってサタンに従いました。神に逆らってサタンに従ったので、神から与えられていたその地球の土地の権利証というものをサタンに委譲してしまったわけです。それ以降(それを罪と聖書は言うのですが)サタンが、悪魔がこの地球の支配権をアダムとエバに取って代わって握るようになります。ところがその状態では当然壊滅してしまうわけです。今でも世界で様々な問題が起こっています。戦争があり、飢饉があり、また虐殺があり、レイプがあり、病気があり、様々な災害があります。「神が愛ならどうしてそんなことを許されるのか。」そうした災害を見たり、不条理な状態を見て心を痛めて神の存在を否定する者たちもいます。しかし実際には人間の罪がそれら全てをもたらした人災であるということを聖書は述べています。人の罪がそれらを引き起こしたんだと。実際に天災と呼ばれるような自然災害もよくよく原因を追求していくと、人間が環境を破壊してそのような災害を引き起こした。引き金になるものを人間が作り上げたということもこれは昨今認められているところでもあります。聖書によればそれらは全て罪が原因であって、その罪の結果支配権がサタンに委譲されたからだと。ただそんな状態を神様が勿論捨て置くはずがありません。放置するわけがありません。神はご自身のひとり子イエス・キリストをこの世に遣わし、サタンに委譲されてしまった、手渡されてしまったその土地の権利証、地球の支配権なるものを、法的に買い取るためにイエス・キリストがご自身の命を代価として支払って下さいました。それが罪の贖い、罪の赦し、イエス・キリストの十字架の死というものです。イエス・キリストが十字架の上で死んで下さって、自分の命をその代価として払って下さったんです。そして正式に本来であるならばその土地の権利証はイエスの十字架の死によって再度(ふたたび)私たちの元に返され、イエス・キリストがそれを所有されるわけですけれども、でもサタンは先ほども言ったように不法占拠をするわけです。自分が既に失ったものを、また自分が敗北したのにもかかわらずゲリラ活動をするわけです。あたかも自分が地球の支配者であるかのような顔をして、未だにゲリラ活動をして、未だにテロ活動を行っているわけです。でも事実は、既に失われた土地の権利証は、地球の支配権は、イエス・キリストが買い取って下さったので、これから必ず世界はイエス・キリストの支配によって良くなります。その話も後にしたいと思いますが、イエスはヨシュアと同じように約束の地にはびこっていたゲリラたち、不法占拠をしていた敵を追い払われます。それがヨ**シュア記**に出てくる戦争です。よく聖戦思想もここから取られますけれども、それは不法占拠をする者たちを追い出す働きであります。侵略戦争ではありません。それと同じように今私たちの時代というのは、不法占拠をしている私たちの敵であるサタン、悪霊の働きを今私たちは霊の戦いにおいて追い出している最中ということです。イエスもサタンのことを「**この世を支配する者**」と呼ばれました。**ヨハネの福音書 12 章**、**14 章**、また **16 章**にも書いてあります。この世を支配するものが裁かれると。十字架が実際に裁きとなるわけですけれども、イエスもまたそのようなサタンのことを不法占有している僭主と見て、「**この世を支配するもの**」と呼ばれたわけです。

そしてそのイスラエルが約束の地に入って完全支配をするまでに、7 年間という期間がかかったことを思い出して欲しいと思います。**申命記 2:14**(**『カデシュ・バルネアを出てからゼレデ川を渡るまでの期間は三十八年であった。それまでに、その世代の戦士たちはみな、宿営のうちから絶えてしまった。主が彼らについて誓われたとおりであった。』**)。イスラエルの民がエジプトを脱出してから荒野で 38 年間さまよったということがそこに記録されています。

そしてもう1ヶ所メモして頂きたいのは、**ヨシュア記 14:7～10** であります。そこでは出エジプトとした最初の世代の

中でヒーローとなるカレブという人、彼は 40 歳の時に出エジプトをしているんですが、約束の地に入って、約束の地が完全にイスラエルの手に占領が済んだ時には 85 歳になっていたということが書いてあります。占領完了時には、カレブという人は 85 歳になっていたとそこに記されています。(『7 **主のしもべモーセがこの地を偵察するために、私をカデシュ・バルネアから遣わしたとき、私は四十歳でした。そのとき、私は自分の心の中にあるとおりを彼に報告しました。** 8 **私といっしょに上って行った私の身内の者たちは、民の心をくじいたのですが、私は私の神、主に従い通しました。** 9 **そこでその日、モーセは誓って、『あなたの足が踏み行く地は、必ず永久に、あなたとあなたの子孫の相続地となる。あなたが、私の神、主に従い通したからである。』と言いました。** 10 **今、ご覧のとおり、主がこのことばをモーセに告げられた時からこのかた、イスラエルが荒野を歩いた四十五年間、主は約束されたとおりに、私を生きながらえさせてくださいました。今や私は、きょうでもう八十五歳になります。**』) ですから 85 歳－40 歳で勿論 45 歳、45 年という数字が出てきますけれども、荒野には 38 年間滞在したということですから、45－38 で 7 年という数字が出てきます。ですからこの**申命記 2:14** と**ヨシュア記 14:7～10** を比較すると、イスラエルが実質約束の地に入って不法占有者を追放して完全に占領を終えるのは、7 年間かかったということが判明します。占領期間は 7 年間。そこを押さえて下さい。

世の終わりにおいてこの 7 年間という期間というのは、非常に重要になります。結論から言いますと、本当に世界が滅んでしまう直前の 7 年間は、患難時代と呼ばれます。その世の終わりの 7 年間はいつ始まるかというと、反キリストがこの世に登場してから。これが**ダニエル書 9:27** に書いてあります。(『**彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。**』) 反キリストとは一体何ですか。この反キリストという人はヨーロッパの指導者となります。今でもヨーロッパは欧州連合になりました。EU になりました。27 カ国今加盟しておりますけれども、聖書によると世の終わりにヨーロッパが再びかつてのローマ帝国のように連盟を結ぶというふうに預言されています。その時には 10 カ国に絞られると聖書は預言しています。今は 27 カ国 EU には加盟しておりますが、それは統合を繰り返して最終的には 10 カ国になります。これがこの先に起こるニュースになります。ただもう 1 つ言っておきたいことがあります。もしそれをあなたが見たら、あなたは携挙されなかったと思って下さい。携挙というのはその患難時代の前に起こると聖書は約束しております。これはいろんな見解があるわけで、異論もある人もいるかもしれませんが、実際に反キリストという存在がこの世に現れたら、既に患難時代が始まります。そして反キリストは 7 年間の中東和平条約を実現します。今もイスラエルとパレスチナの間に和平が進められようとしています。かつてもクリントン大統領によってオスロ合意なども実現したのですが、それもまた無きものとなりました。これからアメリカ主導ではなくなっていきます。これからはヨーロッパ主導で中東の情勢は左右されるようになります。

そして 7 年間の和平条約を結ぶのですが、それは事実上反キリストが世界を支配するという、残された者たちにとっては患難な時代、困難な時代、苦しい時代になります。特にイスラエル人が苦しい目に遭うと。そしてその時代にイエス・キリストを信じて救われるクリスチャンたちも苦しい目に遭わされます。イエス・キリストを信じる者は、皆反キリストに迫害されます。

その患難時代の詳しい描写については、預言については、**黙示録 6～19 章**に書かれています。これもインターネットでまた聞いて欲しいと思います。詳しく述べています。ただ、今皆さんに開いて確認して頂きたいのは、その**黙示録 6:16～17** のところを開いて下さい。『16 **山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と**(これは神のことです。) **小羊**(これはイエス・キリストのことです。) **の怒りとから、私たちをかくまってくれ。**(神の怒りということです。) 17 **御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」**』患難時代というのは神の怒りの日と一言で言い換えても差し支えないと思います。ですから私は、教会は患難時代の前に携挙されると言っているんです。教会というのは神の子どもたちの集まりです。教会というのはイエス・キリストの花嫁ですから、神の怒りの対象に神の子どもがなるはずがありませんし、また小羊の怒り、すなわちイエス・キリストが私たちの花婿として花嫁を怒るということはありえないことです。あなたの夫は、妻のあなたのことを怒り散らし、怒鳴り散らし、貶(けな)し、罵(ののし)る

かもしれませんが、イエス・キリストは違います。イエス・キリストは絶対に花嫁を罵ることはなさいません。雅歌を読めばハッキリします。雅歌も今学んでいますから、また興味のある方は聞いてみて下さい。

話を戻していきたいと思いますが、**第一テサロニケ 5:4** ならびに **9 節**というところにこう書いてあります。そこは教会が患難時代の前に携挙されるということをサポートする聖句でもあります。『[4] **しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が**（その日というのは後で分かります。）、**盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。**[9] **神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。**』御怒りを受ける、これは患難時代のことです。その日に遭うように、その日に私たちが地上に残って患難を通るということがここには書かれておりません。むしろ、そのような患難は通らないと約束されています。その前の**第一テサロニケ 4:16～17** を読んで頂くと、そこに冒頭にお話しした携挙ということについて言及されています。『[16] **主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、**（これはイエス・キリストを信じて既に死んでしまった者がまず初めによみがえり）[17] **次に、生き残っている私たちが**（今のここに集まる皆さんが該当します。）、**たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ**（引き上げるというところが、携挙という言葉の由来であります。ギリシャ語では「**ハッパーゾー**」と言って、力ずくで掴みあげる。さらって行く。連行するという意味です。花嫁泥棒のようにして花婿が私たちをさらって行ってくれる。）、**空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。**』これが携挙の教えです。その後に私たちは、神の御怒りに会うように定められてはいないとされています。さらに**第一テサロニケ 1:10** もついでに読んでおきたいと思います。『**また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから**（患難時代のことです。）**私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。**』やがて来る御怒りから私たちを救い出して下さるイエスが天から来られるのを待ち望んでいる。これは携挙を待ち望んでいるという内容であります。この携挙のことを別の言い方で『**空中再臨**』とも言います。空中で会うからです。それとは別にイエス・キリストが文字通り地上に降り立つ、それを再臨、『**地上再臨**』とも言って、2 つのイベントとしてこれは使い分けられていると、聖書を文字通り信じる者たちは理解します。聖書を文字通り理解しない、象徴的に都合よく理解しようとすると、この 2 つのイベントを混同してしまったり、1 つにまとめようとしてしまったり、または携挙のタイミングというものもまちまちとなってしまうわけです。ただそういう説明も時間がないので割愛させて頂きますが、**黙示録**を開いて頂くと **2 章 3 章**のところには教会の 2000 年間の歴史が記されています。教会がスタートしたのは 2000 年前、日本で言えば弥生時代です。凄い古いですね。そして教会の歴史の終わりもやってきます。それが世の終わりの、携挙をもって終わるということなんですが、それについても**黙示録 3 章**に記されているんです。驚くべき預言です。 **4 章 5 章**になると教会は地上から引き上げられて、天国にいるという描写になります。さっきもお話ししたように、患難時代というのは**黙示録 6 章**から **19 章**までに描かれていると言いました。**黙示録**を文字通り理解して時系列で追っていくと、**2 章 3 章**で教会の歴史が終了します。そして **4 章 5 章**で教会は地上から天に引き上げられていて、**6 章**からは地上では患難時代が **19 章**まで続くと。そのように記されていますから、自然に聖書を紐解くならば、特別勝手に連想したり、想像してなるべく象徴的に理解をしようとしないで、本当に字義通り・額面通り素直な気持ちで読もうとするならば、教会は患難時代の前に地上から引き上げられて天に入れられるということが書いてあります。

今度はまた**ヨシュア記**の方に戻していきたいと思います。**ヨシュア記 3:10** を開いてみて下さい。『**ヨシュアは言った。「生ける神があなたがたのうちにおられ、あなたがたの前から、カナン人、ヘテ人、ヒビ人、ペリジ人、ギルガシ人、エモリ人、エブス人を、必ず追い払われることを、次のことで知らなければならない。**』このカタカナの名前の羅列、これは先ほど冒頭でお話をした約束の地に不法占拠していた民です。これはよくカナンの原住民と呼ばれますが、彼らがここを占拠する前から神様はアブラハムに対してこの地を与えると。アブラハムの子孫に対して、すなわちイスラエル民族に対して約束していたわけです。でも 400 年間も彼らはエジプトに居たので、その間に不法占拠していたわけです。河川敷を勝手にゴルフ場として私有するような、そういうイメージで良いと思います。そこへ神の約束

を信じて 400 年間も遅れてイスラエルの民がやって来たわけです。でもそこにはカナン人を始めとしたここに記されている 7 民族が既に我が物顔をして、そしてイスラエルに対して戦いを挑んできたわけです。仲良く一緒に暮らしましょう、ということにはならなかったわけです。そこで当然のことながら戦争が起こるわけですけれども、この 7 民族という数字にも着目して欲しいと思います。先ほどもイスラエルは 1948 年までは流浪の民だったということを少し触れました。1900 年余りイスラエルは祖国を追われて世界中に離散していたんです。自分の国が持てなかったんです。でも 1900 年ぶりに、すなわち 1948 年 5 月 14 日の独立をもって再び祖国に帰り、そして祖国を復興することが出来たんですが、これは文字通り神業でしかありません。そのような事例はこれまで歴史上ありませんでした。1900 年間も祖国を追われたら、もう大体世界中に散って行ったらその世界中の民族と同化をして、自らの民族のアイデンティティーを失ってしまって、勿論母国語も失うわけです。カルチャーも失うわけです。すっかり外国に染まるわけです。日本人もそうです。アメリカに渡って日系のアメリカ人は、ほとんどもう日本人らしさを失ってしまう。3 世 4 世、もう日本語を話せません。もう完全にアメリカ人になります。顔もだんだん変わってくるんです。面白いですけれども。でも、その中でも本当に日本人としてのアイデンティティを守っていこうとするならば、これはかなり意識的に注意しなければいけません。日本語を常に話して、日本の食事や文化、そういったものを常に守って行かなければいけません。当然受け入れられて行かないかもしれません。周囲からは白い目で見られるかもしれませんし、迫害されるかもしれません。でもイスラエルはそうした歴史を 1900 年間も背負って自らのアイデンティティーを守って、神様が約束されたこと、すなわちイスラエルは必ず再び世界の四方から集められて祖国に帰るんだ。帰還するんだ。これは旧約聖書に預言されていました。でも、聖書を 1948 年以前に読んでいた人たちは、勿論ユダヤ人の中にも神の約束をもう既に信じていない人たちも大勢いました。当然ユダヤ人以外のクリスチャンたちもイスラエルが再び世界の四方から集められるなんて、もう 1900 年間も世界に散ったままなのにあり得ないとそう思っていたわけです。ですから聖書は文字通り理解すべきではないというのが当時のキリスト教界では支配的でありました。ところが 1948 年に神様が旧約聖書で預言されていたこと、また新約聖書にも預言されているんですが、それが果たして文字通り成就してしまったのです。当時のクリスチャンたちは慌てました。今まで自分たちは、聖書を文字通り理解すべきではないと思っていた。象徴的に、霊的に理解すべきだと思っていたのが、ところがそれが文字通り起こってしまったと。奇跡が起きたんだ。やっぱり聖書は文字通り理解すべきなんだということに立ち返っていくわけです。その後も神様が約束されているように、イスラエルが世界の中心となっていきます。

それと今比較して頂きたいのは、**創世記 15:19～21**（『**19 ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、20 ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、21 エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。**』）のところに、やはりカタカナの名前の羅列がありますが、これはかつて神様がアブラハムに約束の地を与えるとした時に、そこに暮らすようになる 10 の民族の名前が（数えてみ下さい。）見られると思います。 10 民族そこにリストアップされています。さっき読んだ**ヨシュア記 3:10** では 7 民族でありました。3 民族足りないわけです。そこがミソなんです。ちなみに世の終わりの時代、反キリストはヨーロッパのリーダーとして彗星の如く現れ、世界総統となるという話をしました。世界を統一するんです。政治的にも、経済的にも、そして宗教的にも。今はまさにそういう時代になってきています。もう国境がなくなってきています。ボーダーレス。全てグローバルという感覚です。そして反キリストがまさに時代の申し子となっていくわけですが、その時代になりますとヨーロッパが、今は EU として 27 カ国加盟されていますが、段々絞られて統合が進んで 10 カ国にまで絞られていきます。かつてのローマ帝国のようになっていくわけですが、さらにこれは旧約聖書の**ダニエル書 7:7～8**（『**7 その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獣が現われた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現われたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。8 私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があった。**』）に預言されていることですが、そこにはやはり反キリストがヨーロッパのリーダーとして支配権を握るということが書いてあるんですけれども、そこにはいろいろな比喩が出て来るのですけれども、3 本

の角が出て来て、それが 3 つの国を表すわけですけども、または民族"nation"を指すんですけども、その 3 本の角が 10 本の角から取られるということが書いてあります。10 本の角から 3 本の角が取られる。10 の連合国から 3 つの国が取られて、7 つの国に最終的には収まっていくということが預言されております。今の EU 27 カ国、しばらくはもっと増えるかもしれませんが、でも段々統合が進んでこれは減っていきます。最後 10 カ国になりますが、でもさらに加えて 10 から今度は 3 つ少なくなって 7 つになると。これは**ヨシュア記 3:10** で記されている 7 民族のその数に呼応しているんです。アブラハムが最初約束した時は 10 民族でした。でも約束の地に実際に入ってからは 7 民族に減ったんです。これは統合されたということです。「それはこじつけではないですか。」と皆さん思われるかもしれませんが、まだこじつけと判断するには早すぎると思います。皆さんが驚くような偶然、所謂偶然と感じるかもしれませんが、これは決して偶然ではないということをまた進んで行きたいと思います。

この反キリストの話ももう少ししておきたいと思いますが、彼は反キリストとは呼ばれておりますけれども、イメージとしてはカリスマ性のある(カリスマ性で言えばアメリカの大統領ではケネディ大統領とか。人気で言うならばかつてのレーガン大統領のような、もう見た目がハリウッド俳優です。)そのようなイメージ、そんな人気のある、ほとんどもう英雄のような存在です。なぜならばこの人が世界で初めて中東に 7 年間の和平条約をもたらすと。それまで中東が、パレスチナ問題が、イスラエルが世界の頭痛の種だったわけですが、それをすべてこの人 1 人の手腕によって解消してしまう。この政治手腕に対して世界は賞賛するわけです。もうこれ以上の人はいないと。まるでキリストのようだということで。反キリストと言うのは英語では Anti christ と言いますけれども、実際にギリシャ語でも anti というのは"**アンティ**"と言って、"**アンティ**"というのは「反対する」という意味だけではなくて、「取って代わる」という意味もあります。キリストに取って代わる者。まるでキリストのような人格者。素晴らしい人。偉人というふうにも映るわけです。でもそれも 7 年間の和平条約の前半の 3 年半だけの顔であります。3 年半、前半が終わると、後半はまるで別人に豹変します。自らが和平条約を進めて、そしてユダヤ人のために今のエルサレムにある岩のドームの真隣にエルサレム神殿を再建するんです。そしてそのエルサレム神殿の最も聖なるところに自ら立って「我こそは神である。」という神宣言をします。文字通りの現人神という宣言をするんです。自分を拝まない者は全員抹殺するという、そこからが大患難時代。7 年間の後半の 3 年半のことを大患難時代と言います。一気に時代は世の終わりへと加速化するんです。当然拝まない者はみな虐殺されます。恐ろしい時代になります。神の怒りは頂点に達するわけです。様々な天変地異も起こります。これまでどの時代にも経験したことのないような恐ろしいおぞましいことが起こります。詳しい事は**黙示録**の学びで、**6～19 章**でそこが描かれていますから、CD やインターネットで聞いて下さい。この反キリストが、反キリストといっても必ずしもキリストと正反対の、真逆のキャラクターとして、まるでサタンの化身のようにして最初に登場するのではなくて、最初はキリストに取って代わるような、まるで聖人のような、偉人のような姿で現れます。ただし、3 年半経つとまさに文字通りサタンの化身となります。サタンに憑(と)りつかれると言われています。

この**ヨシュア記**の中でこの反キリストも実は描かれているのです。**ヨシュア記 10:1**『[1] **さて、エルサレムの王アドニ・ツェデクは、ヨシュアがアイを攻め取って、それを聖絶し、先にエリコとその王にしたようにアイとその王にもしたこと、またギブオンの住民がイスラエルと和を講じて、彼らの中にいることを聞き、[2] 大いに恐れた。**』もう一度、ここは既に皆さんと共に学んでおりますから思い起こして欲しいと思います。エルサレムの王アドニ・ツェデクという人は、連合軍を集めて戦争を引き起こします。誰に対してかというと、ギブオンの住民に対してであります。**2 節**以降も見て頂くと分かります。連合軍もそこに列記されていますが、ギブオンというのはかつてこのエルサレムの王を始めとしたそのカナンの不法占有していた者の仲間のうちの 1 人だったのです。かつてエルサレムの王アドニ・ツェデクはこのギブオンの住民とも連合を結んでいたわけです。同盟軍だったわけです。ところがギブオンの人たちは、イスラエルが神によってこれまでも世界最強の国エジプトに打ち勝ち、そしてカナンの地において難攻不落であったエリコの町が神様の偉大な力によって奇跡的に崩壊し、奇跡的な勝利がイスラエルにもたらされた。そういう歴史的な経緯を知って恐れたのです。「私たちがいくら結束して同盟を結んでも、このイスラエルに勝てるはずがない。」そう思ってギブオンは仲間を裏切ってヨシュアのところに行って「私たちは遠い国からやって参りました。」と嘘を言うんです。「私

たちはあなたたちと和を講じて、そして一緒に暮らしたい。」と言うことで出し抜いて、自ら生き残りを図ろうとするわけです。それを知った仲間の、特にその首領であったエルサレムの王アドニ・ツェデクは怒ったわけです。裏切り者めと。そして連合軍を率いて裏切り者を討伐しようと戦争を引き起こすわけです。最終的にはギブオンはヨシュアを騙したんですが、でも内心ヨシュアたちが、イスラエルが信じる神を信じたわけです。だから仲間を裏切ってでも、嘘をついてでも生き残りたかったのです。彼らはやり方こそ間違ってはいましたけれども、イスラエルの神を信じた結果そういう行動に出たということです。結果的にヨシュアは騙されたとは言え、ギブオンの人たちと和を講じたわけです。和平条約を結んだので、口にしたことは違(たが)えない。約束は守るということで、騙されたことが分かっても約束を守ったわけです。ですからギブオンが襲われた時、イスラエルもまた(本当はギブオンを守る義務はなかったのですが)ヨシュアはギブオンを守るために全軍を遣わすわけです。結果的にそのエルサレムの王アドニ・ツェデクを始めとした、盟主とした連合軍対イスラエルという構図がそこに生じるわけです。このアドニ・ツェデクという人自身が、実は反キリストの型であります。予型、タイプであります。患難時代、世の終わりの 7 年間の時代、ギブオンのような人たちが現れます。教会は患難時代の前に地上から引き上げられて、携挙されて地上からはいなくなります。小説で left behind という小説がアメリカでも、世界的にベストセラーになりました。何千万部という売り上げです。日本語にも訳されています。映画にもなりました。『レフト・ビハインド』読んでいない方は、面白いと思いますから、また映画にもなっていますから DVD でも借りられます。最近近くのビデオショップに行ったら『人間消失』という題でちゃんとビデオレンタルのところに置いてありましたから、何かアクションとかパニック映画とかそういう項目のところに行ってみると『人間消失』というのがありますから、それは『レフト・ビハインド』のことなんですけれども見ていない方、教会にも置いてありますからそれは『レフト・ビハインド』ということでちゃんとそういうタイトルです。そういう物も見ると何となくリアルな感じが受け止れるかと思いますけれども、その教会が携挙された後、患難時代にイエス・キリスト信じる者たちも起こされます。それがギブオンの人たちに例えられるわけです。型ということです。ギブオンのように患難時代、もう教会はいないんです。もうクリスチャンは全部地上から消えたんです。人間消失したんです。でも、取り残された人たちもギブオンのように神を信じるようになります。患難時代に救われるクリスチャンたちは、今のこの場所にいる私たちクリスチャンとは別の存在になっています。反キリストは当然患難時代に救われるクリスチャンたちを迫害します。自分ではなくて、イエスを信じるわけです。イエスに従おうとするので、当然迫害するわけです。患難時代にクリスチャンになる人たちは、十中八九必ず反キリストに迫害されて殺されます。殉教します。ですから、「自分はクリスチャンたちが携挙された後、患難時代になってからゆっくりとクリスチャンになります。」と言う人も、タカをくくっている人もいるかもしれませんが、今は救いの日です。今は恵みの日です。患難時代になってから、勿論クリスチャンになることは出来ます。でもその時には覚悟して下さい。あなたは必ず恐ろしいひどい目に遭います。あなただけではありません。家族も全員皆殺しにされます。かつての日本のキリシタンのように。摘発されて、常にあなたは逃亡を強いられます。公の場で礼拝なんか出来ません。聖書も読めません。公の場では祈ることすらできなくなります。発覚したらあなたは逮捕され、あなたの家族も友人も皆、同罪として処刑されます。でも今はそんなことはありません。勿論今でも共産圏やイスラム圏では一部そういう所がありますけれども、その時代になると、患難時代には世界のどこにいてでも、あなたはクリスチャンになっても(今のここにいる皆さん、クリスチャンには関係ありませんが)これから先クリスチャンになることを考えている人たち。患難時代の前に、できれば今晩もうイエスを主と信じて欲しいと思います。それでも神様の憐みは尽きません。恵みがありますから、クリスチャンたちがこの世から取り去られても、取り残された人たちにも救いのチャンスは与えられていきます。

ギブオンの人たちというのは後にどうなったか。皆さんも思い出して欲しいと思いますが、彼らはイスラエルを騙したんですけれども、和を講じてイスラエルの仲間入りを許されたわけです。彼らはその後エルサレムの神殿が造られると、神殿に仕えるしもべになりました。宮に仕えるしもべ。神殿の使用人としてずっとその身分から彼らは解き放たれることはありませんでした。ギブオンの人たちは後に神殿使用人、宮に仕えるしもべとして何をするかというと、毎日水くみをする。神殿に持って行くんです。また、神殿で生贄を捧げる時のたきぎを割る者たち。そのことがヨシュア

記にも書いてありますし、また彼らがのちに宮に仕えるしもべとして描かれているのは**第一歴代誌**、また**エズラ記**、**ネヘミヤ記**、そこに『宮に仕えるしもべ』という言葉が出てきたら、それはかつてのギブオン人だということを確認して下さい。彼らは一生涯神殿の使用人として水汲み係、一生涯たきぎ割りをする者たちとして仕えていくわけです。イスラエルの聖所で、神殿で一生涯その仕事に勤(いそ)しむわけですけれども、その人たちは患難時代においては、患難時代に救われるクリスチャンたちだと言いました。**黙示録 7:13～15** にその彼らのことが書いてあります。『[13] **長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。」と言った。**[14] **そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです。」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から**（これは患難時代、大患難時代のことです。）**抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。**（これはイエス・キリストの血潮によって罪を洗い清められたという意味です。）[15] **だから彼らは神の御座の前にいて、聖所で**（これは神殿のことです。）**昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。**』これは、患難時代に救われた者たちは全員殉教すると。でも、彼らは天においては永遠に生きて、真の天の聖所において昼も夜もそこで仕えると。それがギブオンの人たちと同じだということを言っているわけです。これは、今の私たちクリスチャンとは別の存在だということも併せて覚えて欲しいと思います。私たちはキリストの花嫁です。彼らは、患難時代に救われる者たちはギブオンのように天においては一生神殿の使用人です。神殿の使用人とキリストの花嫁は全く身分が違います。「天国に行って身分の差なんかあるのですか。」あるんです。でも、その差をお互いがひけらかしたり、または悲観的になって差別感を覚えたり、また不公平感を覚えたり、えこひいきを感じるということはありません。天国に行ったら納得するんです。この患難時代に救われる人たちと、患難時代の前にもう既にこの時点でイエス・キリストを信じて受け入れている者たちは別の存在、別のカテゴリー、別のポジションだということも覚えて欲しいと思います。患難時代に救われた人たちも、天国に行けば文句はありません。不平も言いません。でも出来れば、今このことが分かっているならば、今この違いが分かるならば、今の時点でイエス・キリストを信じて欲しいと思います。彼らは確かに救われますが、私たちとは違います。

患難時代に救われる人たちは、様々な目に見えるしるし・証拠を見てイエスを信じるんです。反キリストを見て「あっ、やっぱりあのいかれたクリスチャンたちが言っていたことが本当だったんだ。」と。「携挙だ、人間消失だ。何をバカなことを。」と私もかつてはそう思っていました。でも、聖書にそう書いてあります。今でもこの話を初めて聞いた人は、「やばいところに来てしまったかな。」と思っているかもしれませんが、でもそれが聖書に書いてあります。でも私たち、本当に教会が携挙されてこの世から居なくなった時に、あとから思い出すんです。「そういえば、あの牧師には見えないアロハシャツを着た怪しい牧師が言ってたな。教会が携挙されたら必ず反キリストが現れて、そこからは患難時代、7 年間も続くんだと。本当にその通りだ。」そういう事件が起こって、そういうニュースが報じられて、その目に見えるところに従って彼らはイエスを信じるようになります。聖書を信じるようになります。こうして私が話しているメッセージのテープや、また『レフト・ビハインド』といった本が残っていくわけです。それを彼らは後から読んで「あっ、ここに書いてある通りだ。ニュースを見れば本当にピッタリこのことが今起こっている。」それをもって信じるんです。

でも、私たちはどうでしょうか。今私たちはまだそういうことが起こることは見ていません。イエスは疑い深いトマスに対して、復活のキリストですけれども、「**見ずに信じる者は幸いです。**」と言いました。トマスは疑い深くて、キリストの復活の体を見なければ、実際にその傷痕を、十字架の傷痕、釘痕、脇に刺された槍の痕を見なければ信じないと公言していたんです。でも、イエスはそんな彼にも出会って下さいました。現れて下さって、言った言葉が「**見ずに信じる者は幸いです。**」私たちも見ずに信じる幸いに今与(あずか)っています。見てから信じても遅くはありませんが、ただ私たちと同じ身分にはなれません。キリストの花嫁としてではなくて、神殿の使用人としてであります。それでも勿論天国では、光栄な立場ではあります。でも、もっと素晴らしい立場が、ポジションが与えられることを、絶対にそれは損しませんから今信じた方が良いに決まっています。苦しい思いをしません。反キリストに虐殺されることもありません。

話を戻して行きたいと思います。今度は**ヨシュア記 2 章**。ちょっと時系列ではなく前後するように思うかもしれませ

んが、全部見るわけにはいかないので、アトランダムで申し訳ないですがご承知して頂いて、ポイントを押さえたいと思います。**ヨシュア記 2 章**には、占領に 7 年間かかったと言いましたが、その占領前の段階が**ヨシュア記 2 章**に記録されています。これから約束の地に入る前にヨシュアは2人の偵察隊を遣わします。2人のスパイを遣わすんです。このスパイは、結果的にはその約束の地を探るというよりも、要するにスパイ活動・諜報活動をするよりも、そこにいた娼婦、売春婦、風俗嬢のラハブと出会って、ラハブの家に匿(かくま)ってもらって、そしてラハブがイスラエルの神を信じて、そしてラハブの家族も信じて、家族ごと丸々救われるという。これはスパイ活動よりも、むしろ宣教活動をするような羽目になったわけです。これが神様の御心でした。スパイに入ったところ、終わってみれば、蓋を開けてみたら証し人として活動して、そして帰って来るわけですが。その2人のスパイは、**黙示録 11 章**によると世の終わりに2人の証人が出てきます。スパイは結局証人になったわけです。神の証人になったわけですが、実際に**黙示録 11 章**に世の終わりの患難時代にも2人の証人が登場します。エルサレムで働く証人ですが、この2人はモーセとエリヤ、再来のモーセとエリヤと思われます。どうしてそれが分かるのか。黙示録の CD を聞いて下さい。時間がないので説明はしませんが、でもその 2 人の証人はモーセとエリヤと思われます。彼らはエルサレムでイエス・キリストことを証しするんですけれども、2人のスパイは、斥候はラハブに「私たちがこれから軍を率いて占領に来る時には、守られるように目印を付けておくように。自分の家の窓辺には、緋色の赤い紐を垂らしておくように。」それは前にも説明したように、結局娼婦の家というのは赤い窓の縁で囲まれていましたので、ちょうどそれは赤い十字架のサインのように映ったわけですけれども、その赤い紐、緋色の紐はまさにイエス・キリストの血塗られた十字架のシンボル的なものとなって、それを目印にしてその家は裁きを免れる。事実ラハブの家族は全員救われて、驚くべきことにラハブはイエス・キリストの先祖にまでなってしまうのです。娼婦が、異教徒が、イエスの先祖にまでなるという素晴らしい恵みに与るのですが、そのラハブは 2 人のスパイを匿ったわけです。匿ったことが発覚して、その匿った町はエリコという町で、先ほども難攻不落の町と言いましたが、そのエリコの町の王が 2 人のスパイが入ってきたことを知って、詮索をして、そしてどうもラハブの家にいるらしいということで探したんですけれども、ラハブは確かにその人たちは居ましたと言って、「でも、その人たちはもう出て行ってしまいました。」と嘘をついて、実際には家に匿っていたわけです。そしてラハブはこの 2 人に対して「今はすぐに自国の軍の所には戻らないで、山の方に三日間身を潜めているように。」という進言をして、そして三日間この 2 人のスパイは山の山間部に隠れて、ほとぼりが冷めるまでそこに隠れて、そして 3 日後にはイスラエル人に合流していくわけです。その後にイスラエルが占領に入るわけですけれども、**黙示録 11 章**の 2 人の証人も実際に彼らは殺されてしまうんです。2 人のスパイは殺されませんでした。でも驚くべきことにこの 2 人の証人、モーセとエリヤとも思われる 2 人は殺されてしまうんですが三日目によみがえるんです。そして天に帰るんです。これも偶然の一致でしょうか。その姿は世界中の人が同時中継で見ると**黙示録**に書いてあります。一昔前の人たちは、まだテレビがない時代、白黒時代でもいいですけれども、世界中が一度に 1 つの事件を、1 つのニュースをライブで見るなんていうことは考えられなかったんですが、今の私たちからするとそれはいとも簡単なことです。衛星中継で世界のどこにいてでもリアルタイムで今起こっていることを私たちはネットを通しても、またテレビを通してでも、携帯電話を通してでも見ることが出来ます。そのことが**黙示録**にもう既に記されているんです。世界はいつかこのような情報技術を持って、ライブでリアルタイムにエルサレムで起こっていることを世界中の人が目の当たりにすると。2 人の証人が殺されて、三日目によみがえる。そこが映し出されるんです。すごいシーンだと思います。当然教会は、その時代は地上に居ませんから見ていないはずです。もしそこをあなたがテレビで見ていたら…。いずれにしても、昔はあり得なかったことが起こります。

エリコの町についても少し触れたいと思いますが、エリコという町は世界最古の町としても有名なんですが、今でもイスラエルに行くと訪れることが出来ます。エリコの町の意味は「月の町」または「月の家」月というのは月の神から来ています。月神礼拝という、月の神が拝まれていた地域でもありました。実際に現代において月の神を信奉している大きなグループがあります。世界宗教となっています。それはイスラム教です。「イスラム教は唯一神ではないですか。月の神なんて聞いたことありません。」と思うかもしれませんが、実際に前にもお話ししたように“アラー”は、

元々は“アラート”という月の女神でした。月経を司る生理の神様だったんです。でもいつの間にか 360 もあった自然崇拝をする(太陽や月や様々な自然を拝む)アミニズム信仰から、モハメッドが(ムハンマドが)全て部族を 1 つに統一するために、宗教も 1 つにしなければいけないということで、自分の家の神であった“アラート”を、女神を唯一神として、ユダヤ教やキリスト教の影響を受けて「これこそが聖書の神だ。」と言い出して、そして拝まない者は全員抹殺して、虐殺していったわけです。それがイスラム教の歴史であって、“アラー”は、元々は“アラート”という月の女神でした。それが性転換をして男になってしまったということなんですが。何故そんな話をしたかと言いますと実は、そのイスラム教のパレスチナ自治区、PLO と言われていますが、このパレスチナ自治区が最初に自治を始めた町こそがエリコなんです。今パレスチナ自治区というとガザがとても注目されていますが、このエリコという町が最初にパレスチナ自治区が自治を始めた、開始した町なんです。イスラエルがくれてやったというような感じになりますけども、そのように最初にパレスチナの自治が始まった町がエリコであったのです。エリコはヨシュア率いるイスラエル軍が最初に占領した町として非常に興味深いですけれども、そこは元々「月の町」「月の家」月神礼拝の町だったということであります。

そして**ヨシュア記 23～24 章**にかけて、イスラエルの占領が終わって、すなわち 7 年間が過ぎた後のことです。**ヨシュア記** 21:45 というところは素晴らしい約束の言葉でしたけれども、『**主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した。**』聖書に書かれているすべての約束はあなたが信じるならば全部実現します。世の終わりの預言もそうですけれども、その結果イスラエルは神の約束の地を手にすることが出来ました。武力によってではありません。武力によってではとても勝ち目がなかったわけです。今のイスラエル共和国も勿論神業だと言いました。1948 年 5 月 14 日に晴れて独立出来ましたけれども、その国連が承認した独立をアラブ連合国は認めなかったんです。そして戦争が起きたんです。イスラエルは、当時の人口は 60 万人。アラブの連合国は総人口で 8,000 万人です。60 万対 8,000 万、勝ち目がないはずです。ところが勝ってしまったのです。それで 1948 年に奇跡が起こって 5 月 14 日に独立しました。その後 1967 年には、まだヨルダンの支配下にあったエルサレムもまた『6 日戦争』という戦争がありました。ヨルダンとエジプト連合軍が、イスラエルを襲ったんです。でも、それでも勝ってしまったんです。これは神様が勝たせたわけです。そして事実上 1967 年 6 月にはエルサレムが聖書の預言通りイスラエルの支配下になりました。奪還したわけです。もうそこからもう完全に世の終わりのファイナルカウントダウンが始まっています。エルサレムがイスラエルのものになった時に世の終わりはもうそこで終わっていても良かったんです。ですから1967年以降、現在2010年ですがもう既にオーバータイムしていると言っても過言ではありません。そういうイスラエルの歴史を見ても、過去においても、現代においても、とても勝ち目がないような戦争を神様が戦って勝利を授けて下さった。これは歴史も証明しております。そしてこの 7 年間の占領も神様が全部成して下さったということで、イエス・キリストも世の終わりに、7 年間の患難時代の後に、最後にこの世に、地上に戻って来られます。再臨されるんです。それを『**地上再臨**』と言って、文字通りイエスが地上に、オリーブ山の上に降り立つということが起こります。患難時代の前に教会が携挙されるのは『**空中再臨**』とも言いました。でも今回は、7 年間の終わり。その終わりには人類最終戦争という『**ハルマゲドンの戦い**』も行われます。その『**ハルマゲドンの戦い**』の真最中にイエスが天から降りて来られます。それをよく**再臨**と言うわけです。その際には天に一緒に引き上げられていた私たち教会、花嫁も共に降りて来る。**黙示録 19 章**にそのことは書かれております。

ちょっとまた前後しますけれども、**ヨシュア記 10 章**を今度は開いて欲しいと思います。そこに先ほども登場したアドニ・ツェデクというエルサレムの王のことですけれども、これは反キリストの型だと言いました。名前の意味は、“アドニ”というのが「主」です。アドナイから来ています。“ツェデク”というのが「義」「正義」です。ですからアドニ・ツェデクというのは「義の主」。この人はエルサレムの王だったと言いました。エルサレムという町の名前の意味は、「平和の町」です。または「二重の平和の町」。平和の王、義の主、これがアドニ・ツェデク。何か立派な名前に聞こえますが、反キリストの型でありました。その一方で、同じくエルサレムの王がその彼より遥か昔に存在しました。**創世記 14 章**というところに、そこには“シャレムの王”という、これはエルサレムになる前の古い呼び名で、エルサレムのことは“シャ

レム”、新約聖書では“サレム”と呼ばれています。これはエルサレムと同じことですが、シャレムの王メルキゼデクが登場します。“メルキゼデク”という名前の意味は、“メルキ”というのは「王」であります。“ゼデク”というのが「義」。“ツェデク”と同じです。こちらは「義の王」です。アドニ・ツェデクは「義の主」であります。同じような名前です。しかもシャレム。これも平和という意味ですから、両者は非常に重なるわけです。キリストと反キリストも似ているわけです。反対するようでもあって、似ているところもある。取って代わる要素もあるということです。このメルキゼデクという人は、**ヘブル書 7 章**にも登場しますが、私は個人的には、メルキゼデクは『**キリストの顕現**』だと思っています。神の子キリストが人の姿をとって2000年前のクリスマスにお生まれになった。それがイエスとしてであったわけですが、その前に**創世記**の段階でもイエスはこのように来られております。その時には人の姿をとって、または御使いの姿をとってきて、『**受肉前のキリスト**』と呼んだり、または『**キリスト顕現**』というようなことが度々**創世記**にもあるんですけれども、メルキゼテクはキリストの型というふうに理解する人もいますが、私は個人的には『**キリストの顕現**』、キリストご自身がその時現れて、実際にアブラハムはこのシャレムの王メルキゼデクに対して、10 分の 1 を捧げています。什一献金を捧げているんです。それに対してメルキゼデクはアブラハムにパンとぶどう酒を与えています。パンとぶどう酒と言えば、もう聖餐式を皆さんは思うと思います。ですから私はそうした理由からも、また**ヘブル書 7 章**には「**メルキゼデクは父も母もない。神の子のようだ。**」というふうにも書いてありますから、これはキリストのように私は思っております。

そのアドニ・ツェデクですけれども、反キリストの型として**ヨシュア記 10 章**では、結果的にギブオンを討とうとしたんですが、ヨシュアが守りに入って、そしてヨシュア率いるイスラエル軍に負けてしまうわけです。そして敗退して彼らは洞穴(ほらあな)に逃げます。アドニ・ツェデクは連合軍の他の王たちと共に洞穴に逃げ込みます。その時に驚くべきことに天から雹の石が降ってきました。**ヨシュア記 10 章**を読んで頂くと分かります。それはおそらくは隕石のようなものだとかつて説明しました。**黙示録 6:15～17**、それは先ほど実は読んで開いたところでもあります。患難時代のキリストに逆らう王たちも、またアドニ・ツェデク連合軍の王たちの様に、隠れるんです。でも、その時にはあまりにも苦しいので「岩が我々の上に倒れかかってくれ。」とか、苦しい声を叫んでおります。アドニ・ツェデクたちも結局見つけられて、剣によって首をはねられるわけですけれども、世の終わりに出てくる反キリスト的な王たち、反キリストの同盟軍の王たちもまた洞穴に隠れて、「岩が我々の上に倒れかかってくれ。」とか同じような目に遭うわけです。

また同じく**ヨシュア記 10:12～13** では驚くべきことが書いてあります。ヨシュアがこの戦いにおいて『「**日よ。ギブオンの上で動くな。月よ。アヤロンの谷で。」民がその敵に復讐するまで、日は動かず、月はとどまった。**』日が動かない、太陽が動かない。そういうことが実際に起きた。これも **10 章**のところでは詳しく学びました。そんなことが起こり得るんです。太陽が動かないで、1 日が長くなる。長い 1 日が、『ヨシュアの長い 1 日』として有名な箇所ですけれども、これもただの荒唐無稽なおとぎ話ではないということも、科学的にも説明しました。歴史的にも説明したわけですが、この日が動かなくなって、長い 1 日をもって、とにかくヨシュアはこのアドニ・ツェデクたちの連合軍をコテンパンにやっつけてしまうわけですが、**ゼカリヤ 14:6～7** にそのことが言及されています。そこにも長い 1 日が記されているんです。『[6]**その日には、光も、寒さも、霜もなくなる。**[7]**これはただ一つの日であって、これは主に知られている。昼も夜もない。夕暮れ時に、光がある。**』そこはイエス・キリストが再臨される時、やはり**ヨシュア記 10 章**と同じように長い 1 日が再現されるということが**ゼカリヤ 14 章**に預言されているんです。これもただの一致、偶然の一致とは私にはとても思えません。

もう一度**ヨシュア記**の方に戻って頂いて、最後に **24 章**のところを、先週見た、ハイライトとした **14～15 節**をもう一度読みたいと思います。これはヨシュアの最後の言葉、遺言でもあり、ヨシュアの名言中の名言となった言葉です。『[14] **今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい。あなたがたの先祖たちが川の向こう、およびエジプトで仕えた神々を除き去り、主に仕えなさい。**[15] **もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、主に仕える。**」』特に最後の「**私と私の家とは、主に仕える。**」これはもう男性陣にとっては座右の銘となったと思いますが、心にしっかりと刻まれたと思いま

す。そしてここの最後の言葉。これは世の終わりの患難時代、最後はイエス・キリストの地上再臨によって終結するんですが、その後ちょうど占領が終わったのと同じように世界もイエス・キリストがエルサレムの文字通り王となって、そして 1000 年間の統治をいたします。それを『**千年王国**』、英語では millennium kingdom と言います。その『**千年王国**』の時に、患難時代を生き残った人たちがイエスの統治のもとで暮らすのですが、イエスがエルサレムで王となると同時に私たちクリスチャンもイエスと共に天から降りて来ますので、イエスと一緒に世界を共同統治するようになります。クリスチャンたちも、キリストの花嫁も世界のどこかを統治します。どこかの地域です。ある人は日本だとか、ある人はハワイだとか。そういう所をあてがわれるわけですけれども、『**千年王国**』というのは後でもお話ししたいと思いますけれども、イエス・キリストがエルサレムで支配をすると言いましたが、それはちょうど罪が入る前の**創世記**に描かれている天地創造時の完璧なエデンの園のような世界です。当時の時代というのは、地球というのは南極も北極も氷で覆われているような所ではありませんでした。実際に南極や北極にも熱帯の植物の化石があります。マンモスなんかも見つかっております。かつてはそこは氷の世界ではなかったのです。地球全体が温室のように、水蒸気層によって地球は覆われていたと考えられています。その時代は病気もなく、またその時代の人たちは、**創世記**を見て頂くと 1000 年近く生きています。長生きしたわけです。今は日本では百歳問題がありますけれども、『**千年王国**』になると千歳問題が問題になるかもしれませんが。いずれにしてもそれだけ長く生きますから、沢山の子ども、孫が生まれるわけです。人口爆発するわけです。そして私たちもそこを治めます。彼らは患難時代を生き残った人たちですから、クリスチャンの今の私たちとは違う人たちであります。その時に、1000 年間がちょうど統治期間ですが、1000 年の終わりになると実は 1000 年間の間、悪魔またはサタンと呼ばれる敵は底知れぬ所に縛られて地上にはいません。イエス・キリストが文字通りエルサレムで統治されて、クリスチャンたちも共同統治をして、そこは完璧な世界です。罪がない世界。今のように汚染されていません。そして人は良いことしか出来ないんです。悪いことはむしろある意味で選べない。ノー・チョイスということです。選択の余地がなかったわけですが、でも 1000 年の終わりにサタンが解き放たれて、サタンにつくか、従うか。それともイエス・キリストにつくか、イエスに従うか。二者択一が迫られます。それがエデンの園にあった善悪の知識の木とまったく同じ役割となるわけです。もし選択の余地がなければ、私たちは自由意志を行使できないロボットのような存在です。「なぜ神様は善悪の知識の木なんか置いたのか。あんなものがあったから人間は堕落したんだ。」と思うかもしれませんが、なければノー・チョイスです。本当に私たちが神を愛しているかどうか。それは選択によって神を選んでいるならば本物の愛ですが、選択の余地がなければその愛は疑わしいですね。地球上に私と妻しかいなければ、妻が私を本当に愛して結婚してくれたかは分かりません。でも、何億人という男の中から私を 1 人選んでくれたのであれば、本当に自分は愛されたんだ、選ばれたんだという実感が湧くわけですけれども。ですから同じように選択の余地が、その 1000 年の終わりにサタンが解き放たれることによって善悪の知識の木の実のような役割をサタンが果たすわけです。ところが恐ろしいことに**黙示録 20 章**にそのことが記録されています。千年王国の完璧な世界で、もう罪も悪も災害も戦争も飢えも渇きもない、弱肉強食もない。その時代は、人々は戦争のことを習わないと**イザヤ 2:4** に、これは国連の理念にもなっている、ニューヨークの国連本部にも刻まれている聖句が**イザヤ 2:4**。それは千年王国のことを言っているんです。もはや人々は戦争のことを習わない。狼も羊も一緒に伏せる。ライオンも草をはむ。子供が蛇と遊ぶ。私は子供の頃蛇と遊んでいましたが、それは千年王国ではなかったのは知っていますが。でも、そういう平和な時代、繁栄の時代が 1000 年間続くのです。でも、そんな完璧な世界に生きながらもサタンが解き放たれると人々は邪悪な心をむくむくと上げて、そしてサタンに海辺の数ほどの人たちが従ってしまうという悲劇が起こります。それが本当の意味での最後の反乱です。ハルマゲドンの戦いの後イエスが戻って来られて、そして世界を統べ治めて、千年王国がやって来ます。千年王国の終わりにサタンが再び解き放たれて、最後の反乱、これはゴグとマゴグの反乱として**黙示録 20 章**に記録されています。そしてその反乱をやはりイエスは治めるわけです。彼らはサタンと共に、サタンに従った者たちはサタンと共に燃える火の池、それはギリシャ語で“**ゲヘナ**”と呼ばれるところ。それは所謂日本語で言う「**地獄**」というところです。そこへ最後に投げ入れられる。最終審判もその前に行われるわけです。それが、最後に悪が完全消滅する瞬間です。**黙**

示録 20 章に書いてあります。

黙示録 21 章には、新しい天と新しい地、これが神様によって瞬間的に備えられるわけです。地はそのゴグとマゴグといったその反乱の結果汚染されてしまいましたので、折角千年王国で完璧な世界だったのがまたこの反乱によって汚れたので、地はもう一度刷新される、贖われる必要があります。新しい地になるのは分かります。でも天国もまた新しくされると。新しい天になると黙示録 21 章の冒頭にあります。なぜ天も新しくされなければいけないのか、刷新されなければいけないのか。それはかつてサタンは御使いだったんです、天使だったんです。天においてサタンは、神のようになりたいとして堕落したんです。傲慢、プライドの罪。これはサタンと同じ罪です。その結果、天国から地に落とされたわけです。落とされた後もサタンは、天へのアクセスを持っていました。黙示録 12 章にサタンは日夜私たちを訴える。「あいつはイエス・キリストを信じてクリスチャンのつもりでいるようだけれども、ノンクリスチャンとまったく変わらない生活をしている。」そういうことを私たちの耳元でも、また人の耳にも囁いて、「お前はなっていないじゃないか。またイエスを裏切ったのか。また同じ罪を犯したのか。もうお前のような者は救いを失った。天国には行けない。」そういうことをサタンは日夜訴えるわけです。天国へのアクセスをサタンは持っているのです。でも、新しい天にされることによって、もうそこも刷新されて完璧な世界になります。罪は、私たちの肉の性質は、完全に消去されます。もう完全に私たちは永遠の神と永遠にハッピーになると。それはハッピーエンディングではなくて、ネバーエンディングです。それが聖書の最後のシナリオになっていきます。

ヨシュア記は今から 3500 年前に書かれたものです。物凄く古いです。想像もつかないほどであります。その歴史的な信憑性、これは考古学でもヨシュア記の内容は証明されています。エリコの城壁が奇跡的に崩れたことや、また太陽が留まって一日長い日があったとか、そういうことも証明されております。また、旧約聖書の写本の数も大量に残っております。中には「そんな話はみんなこじつけで、おとぎ話で、神話で、寓話に過ぎない。」と思っている人もいるかもしれませんが、黙示録という書も、これは新約聖書の最後の書ですが、今から約 1900 年前に書かれました。それも神話だと思っている人もいます。または宗教書だとか、道徳の教科書というふうに思っている人もいるかもしれませんが、でも新約聖書の写本の数、これは 2000 年前に書かれたものですが、世界最大の数を誇っています。写本の数で聖書に勝る本は、古典は他にはないんです。ですから聖書ほど信憑性の高い歴史書はないと言っても過言ではありません。今から 1300 年ほど前、712 年に書かれた古事記。720 年頃に編纂されたと言われる日本書紀は、聖書に比べれば最近のものです。新しいところでも今から 2,000 年前です。ヨシュア記に至っては 3500 年前ぐらい。そんな古代のものを読んでおります。でもそれはおとぎ話ではないということです。『龍馬伝』を皆さん見ていますか。坂本龍馬が実在の人物だったということを皆さん信じているでしょうか。「当然ですよ。教科書でも習ったし、何よりも NHK がやっているじゃないですか。」でも実際にあれらのほとんどの内容はドラマチックに脚色されたもので、歴史的な信憑性は限りなく薄いです。資料が残っていてもそれは後から人がいくらでも書けたものです。それが本物かどうかは分かりません。でも、聖書は写本の数で言えば、もう坂本龍馬の歴史的な資料よりも遥かに多いのです。もっと言ってしまえば、イエス・キリストがこの世に実在したことを聖書の写本の数によって証明出来ます。その一方で坂本龍馬に関する歴史的な資料というのは、ほとんど比べ物にならないほど乏しいものです。ですから写本の数だけ、または歴史的な資料から、聖書以外にもイエスに関する資料はたくさんありますが、それを 1 つとってみても実は坂本龍馬が本当にこの世界に実在したかどうかよりも、イエス・キリストがこの世におられた、確かにおられたことの方が遥かに信憑性が高いということです。坂本龍馬が本当にドラマのようなことをしたかどうかは怪しいものです。そういう資料はないからです。または想像に過ぎない、そういう想像上の、それこそファンタジーと言ってもいいと思います。あれを額面通りまともに受けて楽しんでいるのは、嘘だと思えばいいと思います。作り話だと思えば楽しんで結構です。それは水戸黄門と私は何ら変わらないと思っています。内容的には。水戸黄門と何ら変わらないようなドラマを私たちは勿論本気では見ません。見ないはずです。歴史的な信憑性はないんです。でも、イエス・キリストの存在については、これは考えなくてはいけません。これは作り話ではありません。聖書預言もそうなんです。皆さんにお配りしている週報も、聖書預言が過去において 100%、十中八九実現して、的中してきたのか。聖書の

預言の的中率は 100%です。ノストラダムスの大予言みたいな眉唾物のいい加減ないかがわしいものとは、全く部類が違うというふうに思って欲しいと思います。そうした資料も是非活用して、週報も是非確認して欲しいと思います。最後には私たちは、教会は地上から引き上げられて、携挙されて、そして7年間地上では患難時代ですが、7年間天国ではイエス・キリストとの結婚披露宴、これが**黙示録 19 章**の終わりの方にやはり『**小羊の婚宴**』として描かれています。素晴らしい時代が私たちには訪れます。そして7年間の終わりにはイエスと共に地上に再臨します。エルサレムに来るんです。この中でエルサレムに行ったことがない人はいますか。でもクリスチャンであれば絶対にエルサレムに行けます。しかもタダで。今はエルサレムに行くのは大変危険な行為とされています。なぜならば**エゼキエル 38～39 章**の戦争の預言が、今勃発してもおかしくないからです。ロシアとイランを中心としたアラブ連合国が、今イスラエルに戦争を仕掛けようとしています。今、渡航は非常に危険な状態になっていますけれども、これも聖書の預言で成就しつつあります。最後、トルコが加わらなければこの戦争は起こらないとされていたのですが、最近トルコが加わることが決定しました。それはガザの支援船の拿捕事件から、トルコがこれまでイスラエルの唯一の友好国だったんです。アラブの国で、イスラムの国でトルコだけは仲間入りしなかったのです。でも、このガザの事件によってトルコがイスラエルから離れて、結局は**エゼキエル 38～39 章**に実際にトルコが出てくるんです。ロシアと共に、またイランも出てきます。それらが連合国になってイスラエルに戦争を仕掛けます。**39 章**では核戦争が起こるということまでも書いてあります。核戦争後の処理の仕方まで細かく克明にエゼキエルは記しているんです。時間があればゆっくり話したいところですけれども、もう終わらなければいけません。また最後の方にまとめをしていきたいと思いますが、私たちのクリスチャンの本当の人生は、今お話しした一連の歴史のパノラマからしたら、最後の新しい天と新しい地、そこからが本当の人生のスタート言っても過言ではないと思います。**ゼカリヤ 14 章**に私たちクリスチャンもエルサレムに行くということが話されていますが、でもその後もまだいろいろとあるわけです。ハルマゲドンの戦いがあり、また千年王国があってもそこでは 1000 年の終わりにはゴグとマゴグの反乱があります。でも千年王国が終わってから新しい天と新しい地が始まると、もうそういう争いはなくなります。もうそういう罪の問題、そういったものに私たちは苛(さいな)まれなくなります。

ローマ7章というところには、パウロというスーパークリスチャンが、クリスチャンであるにもかかわらずこの地上の人生において葛藤している姿が赤裸々に書かれています。**ローマ 7:15『私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。』**また **18 節**には『**18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。**』皆さんもこういう葛藤をしていないでしょうか。本当はこうしたいのに、一番したくないことを最終的に自分がしてしまって、全く自分が情けない、不甲斐ない。なんて自分はどうしようもない奴なんだと、自己嫌悪に陥る人もいるかもしれません。パウロという人もそうだったんです。**24 節**で『**私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。**』でも誰かがこの罪の体から、自分ではしたいと思うことができず、したくないことをかえってやってしまう。そういう私たちを、そういう葛藤から救って下さるお方がいると。それが**8章1節**にあるイエス・キリストというお方です。『**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**』と、イエスのうちにある者は、私たちはこの罪の体から、死の体から解放されて、もはや新しい天、新しい地においてもそうですけれども、全くそういう悩みから、葛藤から解放されると。今の地上のクリスチャン人生がすべてではないということを覚えて下さい。今皆さんは葛藤しているでしょうか。クリスチャンになったからこそ「あれも悪いことだ。これも悪いことだ。ノンクリスチャンの時には全然そんなこと、罪悪感も感じていなかったのに、今はいろんなことで思い悩んでしまいます。」クリスチャンなのに苦しいチャンみたいに。こんなことだったらクリスチャンにならなければ良かったみたいな人もいるかもしれません。でも、今の地上のクリスチャン人生が全てではないということを、こういった聖書預言から知ることが出来ます。携挙は今、今晩あるかもしれません。今晩なければ、明日あるかもしれません。何年何月何日ということは言えませんけれども、でもいつ携挙が起こってもおかしく

ない時代がもうやって来ています。皆さんは天国に行く確信があるでしょうか。「私は間違いなく 100%死んだら、または生きていても携挙されて天国に行けます。自信があります。」胸を張って堂々と皆さんは言えるでしょうか。それとも「天国も良いけれども、私は今この世界に魅了されているんですと。今自分のやっていること、自分自身や自分の持ち物にこだわりを持っているんですと。天国なんか誰も行ったことがないわけだし、信じられるものか。地獄だってそうだ。」という人もいるかもしれませんが、でもこの世に固執しているからこそ、自分自身に縛られているからこそ私たちはストレスを感じるわけです。思い通りにならない。頑張っても報われない。勤続 30 年 40 年でもいきなりリストラ。そういう時代です。金融危機で何の関係もない人たちが路頭に迷うようなことも起こってしまう。また自然災害もあって、または交通事故があって、夢が途中で破れてしまう。やりたくないこともやらされてしまう。そういうストレスや、「もう毎日がもう寝れないんです。睡眠薬がなければ私は不眠症なんです。不安で不安で仕方がありません。もう私はパニック障害です。鬱なんです。」いろんな人がいるかもしれません。共通して言えることは、この地上にしか希望を持っていない人たち、と言っていいと思います。もしあなたが天国に行くことを確信しているならば、この地上で何が起ころうと何でも来いです。「どうせ私は天国に行くわけだし、新しい天、新しい地が待っているので、死んでも何も失うものはない。この地上で夢が叶わなくたって構わない。天国では素晴らしい永遠の時が待っているから。」ですからクリスチャンにとっては今がまさに最悪です。クリスチャンにとっては今が最悪です。「今でも私は充分幸せです。」という人もいるかもしれませんが、でも神の預言のパノラマ的な計画からすると、今がクリスチャンにとっては最悪なんです。信じようと信じまいと。これから先がもっと良くなるんです。逆に言えば、ノンクリスチャン、クリスチャンではない人たちは、今が最高です。この後世の終わりになって患難時代がやって来ます。反キリストが出てきたら、もう今の世界はないと思って下さい。環境問題にいくら力を注いでも、世界は破滅します。人口の 3 分の 1 が亡くなるんです。死ぬんです。世界は汚染されると、**黙示録**に書いてあります。もう避けられない核戦争も起こりますし、また隕石も降ってくる。なんか SF みたいな話が、実際聖書には書いてあります。SF は聖書の**黙示録**から実際に題材をとっているわけですけれども、そのような今の時代はノンクリスチャンにとっては最高。これからどんどん悪くなります。世界は決して良くなりません。逆にクリスチャンにとっては、今が最悪です。でもこれからはどんどん良くなります。パウロのように葛藤していても、あなたはどんどん良くなっていきます。ノンクリスチャンにとっては、この世はどんどんまさに文字通りこの世の地獄になっていきます。でも、そのままイエス・キリストを受け入れなければ、あの世の地獄にも行ってしまうんです。火の池、ゲヘナに落ちていきます。

でも、今チャンスがあります。今は救いの日です。今は恵みの日です。今晩もしこの中にイエス・キリストを信じていない人がいるならば、簡単にこの時から私たちの仲間になれます。家族になれます。**ローマ 10 章**に書いてあります。(『9 **なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。** 10 **人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。**』)もしあなたがイエスを主と口で告白し、神がイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと心で信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのですと、**ローマ10章**にハッキリ書いてあります。簡単なことです。イエスを主と口で告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせて下さった、すなわちイエスが神であるということを信じるならば、あなたは救われると書いてあります。患難時代まで待つ必要もありません。今この瞬間信じて一緒に生きていればそのまま携挙されるかもしれません。死んでも失うものはありません。天国に行くだけであります。イエスが戻って来られる日は、限りなく近いと私は確信しています。ですから是非心を開いて、このイエスを主と、神として、救い主として受け入れて欲しいと思います。また、もう既にクリスチャンの方は喜んで欲しいと思います。この世はどんどん悪くなりますが、私たちクリスチャン人生はどんどん良くなっていきます。楽しみで楽しみで仕方がなくなるはずです。今日はこれで終わりたいと思いますが、そのイエス・キリストが戻って来られる日を私たちクリスチャンは待ち望んで「**主よ。来てください。**」と言うわけです。**第一コリント 16:22** に『**主よ、来てください。**』というところが、原語では“**マラナサ**”と言いますけれども、そこからこの教会の名前が採られています。『**主よ、来てください。**』それが“**マラナサ**”です。**黙示録**の最後にも、聖書の一番最後の言葉、

一番大事だと思われる言葉が、やはり『**主よ、来てください。**』です。『**主よ、来てください。**』皆さんも是非まずはイエスを主と信じて、そしてその主が戻って来られる日を確信して、その方が戻って来たらもう人生はバラ色です。永遠にネバーエンディングのハッピーな、文字通りのこれ以上ないシンデレラストーリーが、私のようなあなたのような箸にも棒にも引っかからないようなどうしようもない罪人が、イエス・キリストの花嫁になる。プリンセスになるわけです。素晴らしい話ですね。それが永遠に続きます。だから『**主よ、来てください。**』"**マラナサ**"と私たちは叫ぶわけです。祈るわけです。では名残惜しいですがこの辺で無理に終わらせたいと思います。もっと話したいのはやまやまなんですけれども、また機会を設けたいと思います。